アバンチュールの名の下に

ヨイヤサ・リングマスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アバンチュールの名の下に

【Ｎコード】
Ｎ０００８Ｚ

【作者名】
ヨイヤサ・リングマスター

【あらすじ】
「ワシ、異世界に行くわ」そう言ってノリで世界を渡ったとある国の王様キルカッツ・ウィルムヘッド。
渡った世界で王様は突然愛に目覚める……。

そうして渡った世界でゲットした恋人ユティ・パミュロと共にさらに別の世界に！
二人で転移した世界は人間のいない妖怪の世界。
最初の異世界転移という設定が全く関係ないギャグギャグしい展

開の連続ながら、キルカッツとユティのラブラブカップルはどこに行こうとも互いを愛し合うアバンチュールを求めていくのであった。二人だけの人間として。

ヨイヤサ作品？9　テーマは『キャラの掛け合いの練習&アバンチュール』

第1話：王様、異世界へ行く（前書き）

始めましての方ははじめまして。
久しぶりの方はお久しぶりです。

またも始まるヨイヤサ劇場、今度は前々から書こうと思っていた恋愛作品です。

まぁ、なにはともあれ良ければ読んでみてください♪

第1話：王様、異世界へ行く

「なぁ大臣」

「何です陛下？」

「ワシ、勇者が嫌いじゃ」

そこは見る者を魅了するほど美しい、素人目に見ても高級と分かる調度品に溢れ。

壁に掛かる絵画や床に敷かれた絨毯、どれをとってもこの国の平民の年収以上の価値がある。

そんな部屋の中でも特に金がかかっている装飾の凝った椅子に座り、同じく金のかかった机に山のように乗せられた書類に埋もれているのはこのリンガルド王国の王様、キルカッツ・ウィルムヘッドだった。

「だってさ、うちの国の勇者って凄い口が悪いじゃん。
腕は立つけど反りが合わないというかね」

「本人にそんな事を言っては駄目ですよ陛下。

彼はこの国を長年悩まし続けてきた魔王の隠れ家を殲滅してくれたんですから。
あと今日が勇者さんの功績を表彰をする日だということもお忘れなく」

大臣も王様であるキルカッツよりも勇者を優先して考えてしまう。
そしてそれがキルカッツには面白くない。

「はぁ……、最近城下町で有名な異世界からの召喚魔法で勇者が異世界に行ってくれんかのぅ」

「陛下、魔王は居なくなりましたが魔物はまだいるんですから勇者さんに居なくなられては困ります。
むしろ陛下が召喚されて国を出て行ってほしいくらいですよ」

「はっはっはっ♪
大臣も冗談がうまいな……冗談だよね？」

本気とも冗談ともとれない口調の大臣に思わず確認を取ろうとするが答えない大臣。

歴史あるこのリンガルド王国のキルカッツ王は意外と人望はなかったりする。

「はぁ、もういいや。
それじゃワシ寝るから。
勇者の表彰式になったら起こして」

「あ、陛下。まだ今日中に目を通してもらわないといけない書類が山ほどあるんですから寝ないでください。
陛下の体力を数値化すると、大体１００。
書類の量を数値化すると１万。
安んでいる暇はないです」

「……それじゃワシ死んじゃうんじゃない？」

「いえ、死人ですら生き返るという秘薬がありますから体力ゲージがマイナス９千９百になったら回復させてあげます」

「それって不眠不休で仕事終わるまで寝るなってことでしょ？
ねぇ、そうなんでしょ？」

……

……

まぁ、この国は概ねこんな感じである。

……

ひとり執務室で書類の山と格闘をする王様。

「オラオララオラー！
どうだ書類共！　このワシの超すごい関節技はぁぁぁー！？」

文字通り書類の山と格闘。

つまり目を通し終わった書類を折り曲げて、紙飛行機を作っていた。

「はっはー♪
バキバキに体中を折りたたまれてはもう書類としての職務を果たせないだろ『紙』めぇ？
もうこうなっては裏面印刷しようにもコピー機詰まらせてグチャグチャの酷い有様になるぞ～。
ワシを苦しめるからこんなことになるのだー♪」

と言って、作った紙飛行機を次から次へと窓から外に飛ばす王様。

バタン

「陛下！　なぜ書類を紙飛行機にして外に飛ばしているのですか！？」

「えー、だってもう読み終わったものだし～。
用事が済んだ書類ならそのまま捨てるよりいいじゃん。
もったいない精神ってやつじゃよ」

「この国の重要機密の書類まで飛ばして勿体ない精神もあったものじゃないでしょ！？
いつまで精神的に子どものつもりなんですか？」

「ほら、爺口調の『男の娘』とか人気あるじゃん？
ワシそういうキャラを目指そうと思ってのぅ」

「あんたこの国の王様を何年やってんだよ！？」

王様は今年で５０歳。即位２０周年である。

「それよりも勇者の表彰か？
それなら仕方がないから書類仕事を放り出していこうとするかのぅ」

口笛を吹きながら自然に見えるわざとらしい動きによって、残った書類の山を事故を装って窓から投げ捨てる王様。

「だーっ、あんた本当に王様かぁー！？
誰が落ちていった書類を回収すると思ってんだよ！？」

「ほら、秘密を持たないオープンな国ってのも親しみが持てるじゃろ？
国の秘密だなんて隠しちゃ駄目じゃよ♪」

「あんたなんて異世界へ勇者として召喚されてしまえばいいんだー！！！」

大臣の一言。

「……うむ、それも悪くないかもしれんな。
異世界か……そうじゃ、ワシは異世界の勇者になってしまおう！」

「はぁ？」

きょとんとする大臣を放置し、

「前回の大臣の言葉を考えてみたのじゃが、ワシ、この国に必要ないなら異世界に行くのも悪くないと思ってのう。
では！

『この世に存在するありとあらゆる神よ精霊よ。
このワシ、リンガルド王国国王キルカッツ・ウィルムヘッドの魂を魔王だなんだで困っている異世界に召喚させたまえ』……」

突然呪文を唱えはじめ、それと同時に足元に魔法陣が描かれ、怪しげな煙が室内を満たす。

「それじゃ大臣。ワシちょっと異世界に言ってくるから♪
あとのことは任せたぞい」

「ちょっ、陛下！？
あんた魔法使えたのかよ！？」

「実はワシは魔法の天才でのぅ。
若い頃に修行をしなかった末に、天才魔法使いとして世界の神様から『あらゆる魔法を使う能力』を認められたのじゃ。
ワシが頼めば無条件で神様や精霊たちが魔法の行使に力を貸してくれるのじゃ♪」

そして稲光と共に部屋に満ちた煙が消える頃には王様の姿は部屋からも、この世界のどこからも消えていなくなっていた。

さぁ、物語はようやくスタート。

天才魔法使いにして王様のキルカッツ・ウィルムヘッドの冒険が

今始まる！

第1話：王様、異世界へ行く（後書き）

ちなみにこの作品は話の進みはかなり遅いです。

ギャグですし、キャラの掛け合いを第一に書いていますのでセリフと間の練習でもありますので。

そして毎度のことながら投稿初日は二話更新なので二話同時更新です。

第2話：ラブ突然（前書き）

更新ペースはこれまでよりは落とすかも知れません。

最終話をどうするかは決まってきましたが過程をどれくらい伸ばすかは思案中ですし。

というかまたもや一日に連載開始とか、私はなぜ一日からの連載開始がカッコイイと思うのでしょうかね？

その答えは簡単、「理由はない」。何故なら、カッコいいからだ！

第2話：ラブ突然

「姫様、やはり今回の儀式もどうせ失敗するのではないですかな？」

「うるさい馬鹿！
この完璧超絶美人で文句のつけようのない美の女神である私が失敗するなどあるはずがないわ！」

「いえ、現にこれまで召喚した異世界の勇者というのは全て平民だったでしょう？
それも何の特殊能力もないものばかり」

「私は失敗なんて一度もしていない！
勇者が来ないという実験結果を出しただけよ」

「いえ、世間ではそれを失敗と呼ぶのですが「死ね！！！」グフッ……」

黄金色に塗られた悪趣味な部屋。

その真ん中に立つのは部屋の壁よりもずっと美しく濃い金色の髪を腰に届くほどに伸ばした絶世の美少女。

傍で控えていた男は服装こそはかなり上等の物を着ていたようだ

が、それもこの姫と呼ばれていた少女の理不尽なる暴力のためか、少しばかりくたびれた印象を受ける。

女性の目の前に浮かぶ魔法陣には今なお、魔力を注がれ異世界の勇者を招く儀式は順調に進んではいるのだが……。

「あー、ったく何で異世界の『勇者』が来ないのよ！？
どこぞの小説では平民を召喚しても特殊なルーンが刻まれることで大活躍する平民もいるってのに、私が召喚する平民は馬鹿ばっかなんだから！」

これまでに三度ほど失敗、もとい成功しなかったという結果を得ることになったこの少女の名はユティ・パミュロ。

この世界、つまりユティの世界における王国フニャララ王国の王女様である。

この国は現在『魔王』を名乗るちょっと痛い人物が世界を支配しようと人間も魔族も関係なく配下にしてこの国を攻め滅ぼそうとしているために異世界の勇者が必要なのだ……が。

「ったく、召喚魔法は呼ぶだけでもけっこう疲れるってのに送り返すのにも魔力使っちゃうのよ。
いい加減今度こそ成功させて残りの血なまぐさい危険な仕事は全部勇者に任せるお気楽で平穏な生活を送らないと……」

魔法陣に魔力が溜まったことで呪文詠唱を始める。

「『リーュミロ・パ・ィテン・イエユ』
この超ぜちゅ美人ユティパミュロが命じる！
世界を司るなんやかや、異世界の勇者をさっさとこっちに送れぇぇぇー！！！」

「……噛みましたね」

「噛んでない！」

まぁ、セリフを噛んだのはスルーするとしよう。

とりあえずユティもいい加減飽きてきていたのだろう。

多少大雑把な呪文を詠唱し終えると稲光が発生し、その光が弱まると煙を散らしながら一人の男が魔法陣の上に立っていた。

「……ワシが必要か？」

多少、年食ってはいるが、その眼光は鋭く、まさに歴戦の猛者と言った雰囲気がある男。

「いや、姫様。
どう見てもこの男、いやこのおっさんは失敗でしょう。
けっこう間抜けな顔をしていますよ」

「なっ！？　何を言うか馬鹿！
この男は私がこれまで召喚してきたどの平民よりもすぐれた魔力を内包している。
それが分かんないの！？
これほどの人物なら必ずや魔王を倒してくれるに違いない！
きっと魔王退治もしてくれるに違いない！」

四度目の正直という感じで召喚したのが、渋いダンディーな男とはいえ、勇者っぽくはないので少し焦ったユティ。

「ワシは魔王に困っている世界を救いに来た異世界の勇者じゃ」

「ほら見なさい♪
やはり私の召喚は成功したのよ！
この人は本物の勇者なのよ♪♪」

テンション上げ上げのユティ。

「しかし姫様。
このおっさん、随分と年食っちゃってますよ。

こんなんで剣が触れるんでしょうか？」

姫の付添の男の心配ももっともなもの。

すでにお分かりだと思うがこの勇者はキルカッツ・ウィルムヘッド。

御年５０歳の初老と言っても過言ではない年であった。

キルカッツ自身が渋めのワイルドオヤジを目指しているのもあるが。

「ふむ、じゃあ若ければいいのかのぅ？

呪文詠唱：代償なく覚醒する能力『メトラ・プレイス・ロック・ティー』」

呪文詠唱によってあらゆる神、精霊、それに邪神や悪魔すらも無条件で味方につけるキルカッツの能力によりその肉体は３０年ほど若返った。

「これでどうじゃ？　異世界のお姫様。

ワシは正真正銘の異世界の勇者じゃろ？」

ちなみに言葉遣いはそのまま。

別に若返ってもキルカッツは別段可愛らしい『男の娘』という訳

ではないのだが……。

「カ……カッコいい！
異世界の勇者様、是非とも私の世界の魔王を退治してください！！」

「うむ、引き受けたぞなもし！」

こうして、このフニャララ王国が抱えていた魔王と名乗る痛い人物は異世界の勇者キルカッツの手により滅び去り、世界は平和な時を迎えるのであった……

だが物語はここからがようやくスタート。

もうちっとだけ続きますよ。

第2話：ラブ突然（後書き）

もっとギャグを、もっともっとギャグを……。

8作目が「熱さ」をテーマにしていましたからここらで「ギャグ」をメインに据えなければ私は私らしさを失ってしまいかねませんからね。

しかし更新ペースはどうなることやら。

第3話：キルカッツ・ウィルムヘッドのドキドキ大冒険（前書き）

恋人のユティが大好きなキルカッツの極普通の日常を淡々と描いた物語です。

過度な期待をせずにキルカッツにとっての「極普通」がどんなものなのかを見ていってください♪

今回の作品は3話まで含めてプロローグみたいなものですので投稿初日で3話更新にしました。

第3話：キルカッツ・ウィルムヘッドのドキドキ大冒険

「なぁユティ」

「なんですかキルカッツ様」

「アバンチュールって熱くね？」

キルカッツの突然の一言。

だがその突然のセリフも、その言葉を向けた相手であるユティには当然の流れであり、突然に感じなかったので突然の一言というのもおかしいかもしれないが、この場にはユティ以外の人間もおり、その人間からしたら突然の一言なのでやはりキルカッツのセリフは突然の一言と表現するのが正しいのだろう。

「いやさ、ワシがこの世界に召喚、もとい自分から世界渡りでやってきてからすでに半月経つしさ、そろそろワシらも次の段階に進むべきだと思うんじゃよ」

キルカッツがこの世界に召喚されて魔王を名乗る痛い人物をぶっとばして半月。

その間ずっと食っちゃ寝を繰り返し、恋人らしくイチャイチャとしていたキルカッツとユティ。

そんな二人だが意外とそういうところはピュアなために、まだ手を握った程度の関係だったりする。

そしてキルカッツが行き着いた次の段階というのがアバンチュールというだったのだ。

「アバンチュール……、いいですねキルカッツ様。
私はあなたのその突拍子もないところが大好きですわ♪」

「いやいや、姫様！
キルカッツ殿の発言に対しての感想がそれだけですか！？」

ユティは恋人であり自分の最も愛しい存在であるキルカッツのためならどんな場所にも付いていくし、どんな時でも一緒に居たいと思っているが、それはこのフニャララ王国にて長い間ユティを王女として教育してきた男には理解しがたいものだった。

「キルカッツ殿。姫様をどうするつもりですか！？
アバンチュールだなんて、もしかして危険な場所に姫様を連れて行くんじゃないでしょうね？」

「何を言っておる。

ワシが側にいる状況でワシらに『危険』というものを感じさせることが出来る存在など自然災害を含めたとてあり得んじゃろうが」

実に自然な動きで自分で淹れた紅茶（アッサムのミルクティー）を美味しそうにすするキルカッツ。

砂糖もミルクもたっぷり。彼は甘党だ。

「簡単に言うとじゃな、『ワシ、ユティ、大好き、異世界、旅行』の流れじゃ」

「さすがはキルカッツ様！
私はあなたのそういうところが大好きなんですわぁぁぁ～ん♪」

「えぇぇぇぇー！？」

キルカッツの首に腕を絡ませ互いの頬をすりつけ合う二人。

どこから突っ込んでいいのかわからないこの状況にツッコミを入れたのは、やはりユティの御側仕えである男だった（ちなみに名前を出すつもりはない）。

「異世界って危険なんじゃないんですか！？
姫様みたいな世間知らずが言っても襲われますよ！

食べられちゃいますよ！」

「いい加減ユティ離れをしたらどうじゃ傍仕えのおっさん。
もし危険な目に会っても、そこはほれ、ワシの神様級の魔法でちょちょいのちょいじゃ。
というかこの説明を何度も繰り返させて文字数を増やそうという魂胆はいかんぞ」

「チッ！」

文字数云々と言うよりは、すでに心の中では話しの流れ的にキルカッツとユティが異世界へアバンチュールの旅に出ることは決定事項だと考えているので、その間に自分の出番を増やそうと考えただけであったりする。

「まぁ、そういう訳じゃ。
障害は愛を深める！
すなわち障害が多いからこそ愛であり、愛＝危険なのじゃ！」

「その通り、血で血を洗う血みどろドロドロのバトルの末の熱い抱擁、そして心の内を愛しい殿方のみで満たす甘い口付け……最高のシナリオだわ！」

いつのまにやらアバンチュール旅行のシナリオを執筆しはじめて

いたユティ。

秒速１万文字書き上げるその筆速によるシナリオは、すでに厚さ１０センチを超える超大作となっていた。

「ふふふふふ、ここで私たちが一旦ピンチになって……、キルカッツ様が覚醒して敵を討つ。

その後全身を血に染めながら最後の別れとしてキスをせがむ私……だがすでにその時には事切れてしまった私に涙を流しながらも濃厚なキスをするキルカッツ様。

……と見せかけて実は私の体に付いた血は、相手を殺戮した時の返り血であって怪我ひとつなく夕日をバックに『これからもずっと一緒だよ』なーんて囁かれてみちゃったりして♪　しちゃったりして♪♪」

「私は姫様の幼い頃から教育係もしてきましたが、どこかで間違ってしまったのでしょうか……」

「心配するな、恋愛感情というものは人の心を曇らせる。

だがワシらのこの熱い心は恋ではなく愛である！

お互いを助け合い、幸せしかないハッピーエンドになる予定じゃ」

愛は天使的、恋は悪魔的などと言うが、相手に自分を押し付けるだけの恋ではなく、相手のことを第一に考えるユティの気持ちは紛れもない愛であろう。

ただまぁ、その相手であるキルカッツも盲目的にユティのことを愛しているので、たとえ二人の感情が愛であったとしてもお互いの幸せが周りにとっても幸せかどうかは分からないが。

「そうですか……、すでに私は胃潰瘍が進行していますからね。行くならさっさと行ってください」

傍仕えの男の、この言葉を待っていたと言わんばかりに呪文詠唱を唱えるキルカッツ。

「えーと異世界へ行く呪文ってどんなじゃったかの？」

「それなら私が詠唱しますキルカッツ様。アバンチュールを体験できる世界への異世界転移の呪文ですね♪」

神様から愛されまくっているキルカッツは魔法の詠唱をする必要もないのだが、呪文は毎回何かしら唱えるという、こだわりを持っていた。

だが今回はユティが詠唱するというのでその呪文がどんなものになるのか面白半分、ユティ愛半分で見守っていたのだが……。

「私とキルカッツ様の愛がもっとも育まれるパーフェクトかつ危険いっぱい夢いっぱい、血みどろドロドロ愛憎劇が繰り広げられて人

が人を信じられず、それでいて愛し合い、殺戮本能に溢れた人たちが平和で暮らす活火山しかなくて毎日火山が噴火して海は三日に一度酸の海になり紅い月が出るような気持ち悪さに溢れた世界を『造れ』♪」

異世界への転移だと思っていたキルカッツの意表を突いたのは何よりもその『造れ』の部分だった。

何を造るのか？

どんな世界になるのか？

そんな考えがよぎったが、キルカッツは考えることをやめた。

すなわち流れに身を任し、成り行きを楽しもうというだけの思いからである。

第3話：キルカッツ・ウィルムヘッドのドキドキ大冒険（後書き）

そして当然の流れながらこの作品も段々と三人称から一人称の作品になりますのでここまでが三人称の話。

一人称のキルカッツ視点の話になるともう少しだけ暴走出来ると思います。

流石にこの程度の勢いでは「突拍子もないw」とか「馬鹿すぎるw」みたいなツッコミは来ないでしょうしね♪

私の戦闘力はフロム指数１８０万です。

第４話：作者は天狗が嫌いなのか？　いえいえ大好きですよ。（前書き）

漫画『うしおととら』の河童は一度しか出さない使い捨てのキャラかと思いきや最終話付近で再登場していましたし、私は河童好きでもありますね。

あまり関係ありませんが。

第４話：作者は天狗が嫌いなのか？　いえいえ大好きですよ。

ショワワワ～ン

魔法勇者ならぬ魔法王様キルカッツ&その恋人ユティの二人の物語の始まり始まり♪

って言ってもこの物語は基本的に一人称だから上での文もこのワシ、主人公キルカッツ・ウィルムヘッドのセリフなんじゃがな。

流石はキルカッツ様、前話まで三人称だった小説の地の文を、突如として一人称に変えてしまうだなんて小説の常識を悉く塗り替える御方ですわ♪

「いやいや、一人称だと分かっちょるならユティはワシの活躍を静かに見といてくれんかの？

一人称小説の地の文で、視点変更なしな上に、キャラ二人がセリフを入れるだなんて読む人がこんがらがっちまうわい」

「ふふ、確かに作者の信念はひたすらに笑えるギャグだけでなく、読みやすさの追及もあるのかもしれないけど、笑いにも色々な種類があるものですよ。

シュール、ジョーク、ギャグ、カオス、アメリカン、何を使っても面白ければいい。

そうなると面白ければ小説という枠にとらわれるのは良くないと思うのですわ♪」

「まぁ、そうじゃのう。
確かにワシの愛しのユティの言うとおりじゃ。
それとここまでの会話は全て前書きなので良しとしよう！
では本編へゴー！」

「はっはー！　驚異の大魔法使いキルカッツ・ウィルムヘッド&その最愛の恋人ユティ・パミュロ、世界渡りに成功の巻～♪」

「ひゃっはー！　絶世の美剣士ユティ・パミュロ&その最愛の恋人キルカッツ・ウィルムヘッド参上よ～♪」

互いに抱きあうようにして世界を渡ったキルカッツとユティ。

景色を見渡せばどこかの草原地帯のようだが何も見当たらない。
少し離れた場所に森があるようだが、その奥にでも行けば集落があるのかもしれないが、少なくとも二人が現れた場所には何もなかった。

はてさて、二人が最初に訪れた世界はどんな世界なのだろうか？

ちなみに、ユティが剣士という設定は今思いついて追加されただけで、伏線も何も張っていなかったので何も疑問に思う必要はない。

ちなみにちなみに、先ほど一人称でやると言っておきながら、いまだに三人称なのは何となくである。

三人称も作者は好きなので、もうしばらくこのまま楽しむのも悪くないと思っているのだ。

「ややっ！　なぁユティ、あっちに誰か人の気配があるぞい♪」

「第一異世界人発見ってところね。

早速私たちの愛を見せつけなくっちゃ♪」

森の奥……ではなく、そのさらにその奥の奥だろうか。

潮の香りがするところからしてこの近くに海があるのだろうから、その近くに村でもあるのだろう。

「異世界での適当魔法その１：乗り物出てこーいの術♪」

キルカッツがそう言うと草原には突如として真っ赤なスポーツカーが！

しかし、キルカッツがただ車を出すだなんてつまらないことをす

るわけがない。

この車は異世界トリップのチート主人公がよく使う空間魔法から取り出したり、無から有を生み出す創造能力でもなく、その辺の草や木を魔法で変化させたものである。

この辺のしょうもないところで他作品との差別化を図る辺りが作者の変な癖とでも言うのだろうが気にしてはいけない。

これも今更のことなのだから。

「流石はキルカッツ様！
スポーツカーに見せかけていますけど、この車の原動力は術者の脚力のみなんですね♪」

「ＨＡＨＡＨＡ♪　その通りだよ愛しのユティ～。
ワシの魔法によって身体能力無限アップ＋時間や距離をいじる魔法によってガソリンみたいな時代遅れなもので走る車なんて、目じゃない速度が出せるのじゃ！」

そう、ただ車を出しただけではない。
この車は見た目こそ普通のスポーツカーのようでいながら人力車なのだ。

キルカッツは魔法により身体能力を強化しており、疲れることなく超人的スピードが出せるので、ガソリンやバイオ燃料などの古臭いものに頼らないのも当然である。

「車の運転の描写はオールカット♪
そして到着じゃ！
車の運転だなんて面倒な過程は、はしょるのが魔法使いの常識！
人の気配を追ってきたものの、どうやらこの村？　を襲っているのは……ありゃ天狗かの？」

「ここに来る途中に、異世界ファンタジーでは定番のドラゴンを轢き殺したりしたのも『面倒な過程』に含めてしまうだなんて流石はキルカッツ様♪
それに着いた先の村にいるのは間違いなく天狗でしょう。
赤くて長い鼻、それに翼を持っているだなんて天狗以外にはいませんわ！
でも、この世界では妖怪変化の類が普通にいるのでしょうかね？」

着いた村では村人らしき人たちが天狗に襲われているようだった。

「ぐっがっが。食い物よこせてん。
俺達『天狗っぽい族』に狙われたからには、命か食い物のどちらかを差し出すのだてん」

どうやら天狗っぽい連中は種族が「天狗っぽい族」らしい。
本物の天狗とは違うのだろうか？

「そこまでに、しんさい天狗っぽい連中よ」

「何者だてん！？」

敵は武装した天狗っぽい有翼の集団。

見たところ達人級（マスタークラス）の強さを持つ者もいるし空からの攻撃は戦闘では厄介だろう。

だが、我らが主人公＆ヒロインのキルカッツ＆ユティの二人はそんな連中相手に怯むほど弱くはない！

「義を見てせざるは勇無きなり。
ただしエロスはある！　みたいなノリでいかにもな悪人のお前たちを倒させてもらうわい」

「キルカッツ様の言う『エロス』というのは主に私との甘い生活を指すものであって、貴方達とは関係ありませんので私の恋人をとるようなら殺しますので。
ええ、十全に殺してあげますとも」

気分は正義のヒーロー。
誰もが憧れる英雄の力を実際に持っている二人は常にノリで行動することを心掛けている。

この状況で助けに入らないという選択肢は最初からなかったのだ。

なぜなら面白そうだから！！

「ふっふっふ。俺達天狗っぽい族に歯向かうならば「ちょいさ！」ぐわばぁ～」

敵が喋ってる最中に殴り飛ばす。
これは勇者の基本である。

「正義は勝つ！
ユティも一緒に暴れんしゃい」

「任せてマイスウィ～トダーリン♪
愛のラブラブアタック！」

けっこうな数がいた天狗っぽい族の連中だが、チート丸出しの二人に広域殲滅魔法と広域殲滅剣技を同時に食らったことで、まとめて空の彼方へと吹き飛んでいき星となった。

この物語はチートな主人公とヒロインがメインなのでバトル描写はあっさりとします。

「これにて一件落着じゃ。
村人連中も安心せい、悪人は全員吹っ飛ばしたぜぞい」

「私とキルカッツ様の愛に感謝しながら食い物を寄こしなさい」

「そりゃ強盗じゃろ。
さっきぶっ飛ばした連中と変わらんわい」

そこでキルカッツは初めて村人たちを見てみたのだが、なぜか村人たちは頭に食器を乗せている。

先ほど吹き飛ばした天狗っぽい連中が妖怪の天狗なのだとしたら、この村の連中は……。

「ありがとうございました異世界の勇者様方。
わしはこの『カッツパルゲル村』村長のピン・シリュウという者ですじゃ。
一応『賢河童族（けんかぱ）』の長もしております。
恩人でもあるお二人の来訪を歓迎しますので幾らでもごゆるりとしていってください」

ピンと名乗る初老の男は何故かキルカッツとユティが異世界人だと知っているようだ。

「はて？
ユティ、ワシら特に自己紹介もしてないのに異世界人ってことが知られておるぞ」

「そういう物語なんでしょう。
疑問に思っては負けだと思いますわ」

特に気にするでもないユティ。

確かに気にする必要もないのでキルカッツは流すことにした。

「それじゃよろしく頼む、ピンの爺さん。
ワシはキルカッツ・ウィルムヘッド。世界一の大魔法使いにしてユティの恋人じゃ。
ゆるりとしていくぞなもし！」

「私はユティ・パミュロ。世界一の剣士にしてキルカッツ様の恋人よ」

何故か異世界に来ていきなりだが二人はとりあえずの住処を手に入れた。

はてさて、この二人の恋の行方はどうなることやら？

第４話：作者は天狗が嫌いなのか？　いえいえ大好きですよ。（後書き）

武器の「カッツバルゲル」はゲームではよく見る名前ですし、知っている人も多いとは思いますが、この武器の名前を見て最初にカッパをイメージしたのは私だけではないはず！

第5話：王様、村に馴染みまくる（前書き）

『狼と香辛料』のホロは賢狼と呼ばれていました。

しかし河童もそれに負けず劣らず知的な妖怪だと思うのですよ。

第5話：王様、村に馴染みまくる

おうワシじゃ。キルカッツじゃよ。

ノリで三人称で始めてしまったが、本来ワシのような究極素敵で究極カッコいい究極の主人公の物語なら一人称が基本じゃから今回からは一人称でいくぞ。

今回はユティの介入もなく、どうにか無事にワシ視点の一人称作品として始められそうじゃわい。

ではスタートなの！

「と言う訳で、この村にしばらく世話になるキルカッツじゃ。よろしく頼む！」

「前回の続きとはいえ、いきなり余所の世界の見知らぬ村に住み込み宣言とは流石はキルカッツ様！
私の愛する殿方は対比物が一切見当たらない最高の方ですわ♪」

『天狗っぽい族』を撃退したワシらは『賢河童族（けんかぱ）』という人たちのおる村に厄介になることにしたのじゃよ。

ワシが思うにああいった手合いの連中は懲りずにまた来るからのう。
用心棒をする、という理由もあるが、一番の目的はユティとワシのアバンチュールを彩るおまけとして天狗のような敵を求めておるからちょうど良いと思っただけじゃ。

「えーと、村の恩人を泊めるのは構わないのですが、説明も何もなしで『と言う訳で』という始まりだけでは分からないのですが……」

「私達はお互いに愛し合い、この世の愛のすべてを極めようとこの世界にやってきました。
なので特にこれと言った目的もありませんし、この村に厄介になりたいのですわ」

いまいち理解出来ていなかった村長らしき人物に説明補足をするユティ。

おかしいのう、ワシは「ユティが大好きじゃからこの村に泊めてくれ」ときちんと説明したというのに伝わらなかったのか。

「キルカッツ様、私たちの愛はお互いへの言葉を不要としますが、他者には言葉にしないと伝わりませんわ」

「はっはっは♪　そういえば口に出して言葉での説明はしておらな

んだのう。
しかし、相変わらずユティは可愛い！
理解しておらんが、その可愛さに意識の大半を持っていかれるので、とりあえず分かったと言っておこう」

ユティさえ居ればどうでもいいしの。

と言う訳で、今度こそこのカッツパルゲル村に世話にになることとなったのだ。

「では改めまして、わしは村長のピン・シリュウと申しますじゃ。
ちなみに貴方方の心を読むと『河童の癖に頭に載せるのは皿じゃなくてもいーのかよ？』と思っているようですが、私たちは趣味で皿を乗せているだけなので無くとも問題はないのですよ」

「心を読んだってのは置いといて、河童のトレードマークでもある頭の皿は趣味で乗せているのか？」

「帽子みたいなものなんでしょうキルカッツ様。
それにそこに注目するよりも、かっぱなのに緑色の全身タイツを着ていないことの方が私には驚きですわ。
河童＝緑って気もしますし」

カッツバルゲル村の河童たちは頭に載せる食器は皿ではないだけでなく、服装もそれぞれに個性があるものを着ている。

やれやれ、最近の妖怪は自分たちの種族的アイデンティティーに誇りはないのじゃろうか？

「ほっほっほ、それは古い価値観というものですよ。
この世界、わしらは『わっちふぃーるど』と呼んでおりますが、この世界に生きるものは皆、他の世界では妖怪だの化物だのと呼ばれる存在の遺伝子を人間に混ぜることによって誕生した人工的な亜人種だと聞いております。
古代人は科学力が優れていたそうですじゃ」

いやいやいや、遠い目をしているが村長さん。あんた一体何者じゃ？
というかこの世界、『わっちふぃーるど』って何？

「キルカッツ様、『わっちふぃーるど』とはこの世界の名称で、古代人というのは彼ら亜人っぽい人らを作った存在のようですわ。
私も村長の心を読んでみましたが、どうやらこの方は数千年も生きている大妖怪。
あまり一話に情報を詰めっ込み過ぎるはのは作者的にも面倒なので、詳しい話は次回以降にでも説明しますがゲーム『うたわれるもの』の世界を妖怪に置き換えたものを想像していただければ分かり易いかと思います」

「ほほ～、やっぱユティも心が読めるのか。
ちなみにワシも１０８以上ある特技で村長の心の中を読んでやっ

たから説明は不要じゃよ」

ちなみにこの世界の成り立ちに関する記憶もごっそりワシの頭の中に転写しておいたからこの世界で暮らしていくのにそうそう苦労はせんじゃろう。

ただ、ワシとユティは連中の言う『古代人』と同じく、妖怪っぽい容姿をしておらんから人里などでは注目を浴びることになりかねんがのう。

「さぁさぁ、立ち話もなんですし歓迎しますですじゃ、異世界人にして種族『人間』のキルカッツさんにユティさん。
この村の名産品であるズッキーニ料理でも召しあがってのんびり過ごしてくださいですじゃ」

村長……、古代人がどんな知識をあんたに与えたのかは知らんが、河童＝ズッキーニという公式は成り立たんぞい

第5話：王様、村に馴染みまくる（後書き）

天狗に関して言えば、私は「深山の女天狗」が、かなり好きですね。

自己流ムエタイ使いの宇宙人とタッグを組ませていましたが弟には勝てなかった……。

こちらの攻撃全てをホールド技で返してくるだなんて上手すぎだろ！？

（格闘ゲームの『ＤＯＡ２』の話です）

第６話：海で最強は誰だ！？　それは王様。（前書き）

昨日はモンハンしていたので書けませんでした。

第6話：海で最強は誰だ！？　それは王様。

「あぁ～、暇じゃ暇じゃ。
いい加減このあいだ追い返した天狗共もまた襲ってこんかの～」

「そんなキルカッツ様に飽きることのない私の魅惑の肉体はいかがでしょう？
ご飯が炊けるまでまだ時間がありますし前菜にいかが？」

「はっはっは、それは愚問じゃな。
むしろメインディッシュの勢いで戴かせてもらおうか♪」

「あぁん、キルカッツ様ったら激しすぎますわぁ～♪」

「あんたら何しとるん？」

それはカッツパルゲル村に世話になって一週間ほど経ったある夜のことじゃった……。

「いやいや、地の文で無駄なナレーションいれなくていいから。
実際あんた達が来てから何も起きていないんだから特筆して語ることなんてないでしょうに」

「デビットもつまらんことに一々口を挟むでない。
ワシとユティの愛の営みを邪魔するならそれ相応のアバンチュールを持って来んかい！」

「ふふふ、惚れた女の子に告白する勇気もないような河童に私たちレベルの愛は見ているだけでイライラするのでしょうね。
ほら、見せびらかしキッス♪」

チュッ♪
おおぅ、ユティのやつ、これまた濃厚なのをしてくるな。
だがそれ以上に深い愛情をもって受け止めることこそ男らしさ！
じゃが今はまだ昼間じゃし、ユティの口内を歯の裏から下の裏まで丹念に楽しむだけで我慢するとしよう。
ユティとの結合は深夜にするとして、今は熱い接吻のみ済ませて侵入者を見やる。

侵入者の名前はデビット・カッパリョウイキくん（１８歳）。
村の酒場の看板娘であるマオちゃんに恋心を抱きながらもその思いを伝えられないチキンじゃ。
河童なのにチキン。ぷっｗ

「お、俺はマオちゃんにそんな感情持ってねーし！

キルカッツさんやユティさんを羨ましく思ってなんかねーし！」

「お主は心を読むまでもなく、本心が丸分かりじゃの～」

彼は村で唯一の魔法使いで、魔法を使った芸を宴会などで披露することを生業としておる。

なのに手品は出来んという不器用なやっちゃな。

「それよりもデビットさんどうしたんですか？
この時間は私たちもご飯が炊きあがるまで愛の営みをしているってのは知っているでしょうに」

「あぁ、そういえば要件を忘れていました。
実は海岸で警備をしていた自警団の者が、海から海賊がやってきたというものですから」

「おお？　こりゃ、もしやワシらが村に来て二度目の賊撃退戦か？
海から来るのは海賊以外に居(お)んめい。
それで村で唯一の戦闘職であるワシらに迎撃せえっちゅーことに違いない！」

久し振りの戦闘じゃ！　腕が鳴るのう♪

ちなみに、こ奴ら河童一族は河童と言いつつも、海で漁をする生活を基本としているために漢字で書くなら海童なんじゃろうけどな。読み方は『かぱんちゅ』って感じか？

頭には皿の代わりに思い思いの食器を帽子として被っておる以外特に人間と変わらんし。

で、それはともかく海岸に行ってみた訳じゃよ。

「うはははは～！
俺は～～、海賊の～～、カイ・ゾクオだ～～！
お前らからぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　奪いまくってやるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！」

ふむ、セリフの前半と後半の伸ばし方を変えるとは、こ奴、生まれながらのエンターテイナーじゃな。

「ほい、戦闘シーン割愛魔法、『アクヲウーツ』！」

当然の流れで海賊との戦闘シーンは割愛じゃ。
作者は自身の三作目で戦闘シーンの無意味さと、つまらなさを学んでおるから基本チートなワシらの一方的な蹂躙シーンは書くはずがない。

単純に石化魔法みたいなのを掛けただけじゃから戦闘とすら呼べんのじゃがのう。

「随分と前にな、石化魔法って割と有名な魔法じゃが、対象をどんな石材に変えるのかが気になって実験したことがあるのじゃよ。
それの応用として今回は海賊どもには心太（ところてん）になってもらった」

「石化魔法で心太に変化させるだなんて流石はキルカッツ様。
では私がこのあと料理しますので晩御飯に追加しましょうか」

「それはやめておけ。
連中はどう見ても不味そうじゃ」

正直海賊だなんて生産性のない連中、風呂に入っているかすら怪しいからのう。
接客業の人間を見習え、身だしなみに気を使っておるぞ！

「まぁ、晩ごはん云々はさておき、どうします？
私としてはもうご飯は炊けているでしょうから帰って食事後に朝までコースを希望しているのですが」

「確かにのぅ、ワシら魔法で体力無限じゃし、この程度の海賊でアバンチュールっぽさは出んかったしのぅ」

仕方がないので海賊の後始末はデビットに任せよう。うんそうしよう♪

「ちょいキルカッツさんにユティさん！
俺に海賊の後始末任せてんじゃねーよ！」

確かに海賊連中は３０人くらいはおるか。

一人では大変じゃろうが、この騒ぎを聞きつけて村人たちが海岸までやってくる可能性があるからワシがこれ以上働く必要もあるまい。

「いやだから、それは可能性の話であって、村の連中は普段から火薬だの爆発物を趣味でいじったりしているから、あんたたちの魔法の爆音程度じゃここまで来ないって！！」

そうしてワシらは自宅へと向かうのであった。

めでたしめでたし♪

「めでたくねぇぇぇぇぇぇー！」

ちなみに村長を筆頭に、この事件のあらましを海岸からずっと眺めていていた村の連中は、海賊が来たのもワシらに退治されたのも知った上でスルーしたそうな。

第６話：海で最強は誰だ！？　それは王様。（後書き）

本当に自分でも予想出来ないですね。　しかし楽しい！

まぁ、アクセス数は、オリジナルなうえに、ジャンルが恋愛でこの内容な上に、私自身はっちゃけてますから、乃ビないですけど。

数少ないこの作品を読んでくれている人には感謝しております。

これからも人が書かないような自分らしい文章を書いていこうと思っております♪

第七話：ホース・キックの呪いは嫌じゃな（前書き）

ミニ四駆がいまマイブーム。
子どものおもちゃなだけに、Ａｍａｚｏｎで覗いてみたらどれも安く手に入りますので買っちゃいましたｗ

昔のパーツやマシンも見つかりましたが、こういうのは作るのが一番楽しいので新しくいくつか購入したマシンの塗装や改造が熱いです♪

まぁ、購入に至った要因は、昔のマシンの中で一番のお気に入りが見つからないってのもあるんですけどね。

第七話：ホース・キックの呪いは嫌じゃな

いやな、ワシは本当にユティを愛しておるんじゃよ。

いやマジで。

本当に心の底から声を大にして叫び続けることが出来るくらいに愛しておるんじゃよ。

じゃから海賊退治の後に家で食事を済ませ、ユティというメインディッシュを美味しく戴いて朝までコースとなり、日の出とともに揃って夢の中～ってなノリじゃったんじゃが次の朝はえらい早くに叩き起されることとなった。

何でじゃ？

「それは、あんたが海賊退治の後始末を何もしなかったからですよ！何で石化魔法掛けたまま放置したんだよ。めっちゃ重かったんだぞ！！」

やってきたのはデビット・カッパリョウイキ君。

村の酒場の看板娘のマオちゃんの幼なじみにして恋心を抱いていながら何も言いだせないチキン妖怪。

そしてワシとユティの間柄を妬ましく思っている設定のキャラ。

「そ、そんなんじゃねーし。
俺はマオちゃんみたいなバカでアホでマヌケな女なんて何とも思ってねーし。
キルカッツさんやユティさんの関係を羨ましく思ってなんかねーし。
てか、前回の話でも同じ説明したじゃねーか！」

「正直にならんかい若人（わこうど）よ。
チャンスは諦めない者にのみ掴めると言うが、諦める云々の前に自分に正直にならんとチャンスの存在にすら気づけぬうちに終わってしまうぞ。
そして、こういう展開だとこの会話は聞かれていると思っておいた方がええ」

「聞かれている？　誰にさ？」

勿論前回の話でもした説明を繰り返したのじゃから、前回で名前だけしか登場していなかったが確実に出てくることを予想されていたであろうキャラじゃ。

まぁ、お約束というものじゃな。

「ふーん、そっかー……デビット君ってば私のことそんな風に思ってたんだー。
せっかくの年の近い幼なじみだし仲良くできればいいなー、なんて思っていた私が馬鹿みたいだよねー」

カッツバルゲル村唯一の酒場にて看板娘兼料理長もこなしているマオ・カパシンちゃん。

最近他の男連中からもモテモテだが、内心では幼なじみのデビット君からの告白をずっと待っているという健気な少女……と、ユティの収集した情報で聞いておる。

「いや、ちょっと待ってくれマオちゃん。
俺はその……そう！　これは全部キルカッツさんのせいなんだ！
俺はお前のことを嫌ってなんかいないし、バカでもアホでもマヌケとも思っちゃいない！！！」

「……嘘だね。
デビット君の目は嘘を付いている眼だよ」

その通り、デビット君は嘘を付いている。

彼がマオちゃんに好意を抱いているのは本当だが、マオちゃんはドジっ子である。

なので、デビット君がマオちゃんのことをバカでアホでマヌケだと思っているのは紛れもなく本音なのじゃ。

そしてマオちゃん自身、その事を言われるとキレる。

「……キルカッツ様、人の恋路にあまり関わると馬に蹴られて死にますし、ここらで蚊帳の外に行きましょう」

先ほどから静かだと思いきや、武人である為に気配察知に定評のあるユティはデビット君が家にやってきた後にマオちゃんまで来て喧嘩をするというのを予想して関わらないように食事の準備をしていてくれたらしい。

流石にワシも気配察知の魔法を展開しておかねば人の気配だなんて感じれんからのう。

それよりも……。

「おぉ、ユティもう朝ごはんの支度をしてくれたのか。
流石はワシの愛しき障害の最愛を誓った女じゃ。
あとは若い二人に任せてワシらは朝食にでもするか」

「ふふふ、昨日は激しかったですからね。
アジの干物をを用意してありますよ♪」

すでに朝食の準備をしていてくれたマイスゥイ～トハニーのユティ。

流石はワシのユティじゃ！

海が近いこの村は魚は名産品。
そのためにユティが用意してくれたアジの干物は三毛猫の探偵が見たら舌舐めずりするくらいに旨そうじゃ。

「まぁ、実際にユティの手料理は旨いんじゃがな」

「それでも、その当たり前のことを口にしてくれるキルカッツ様が私は大好きですわ♪」

「はっはっは、愛(う)い奴じゃ♪」

そうして朝食を美味しく戴き、さぁ適当に村の散歩でもしようかと思ったところでデビット君とマオちゃんの喧嘩は終わったらしい。

「終わったかの？」

「あ、キルカッツさん。喧嘩でしたら終わりましたよ。
デビット君は私に拳を振るう事は出来ないけど私は殴れますからね。
一方的にボコボコにしてやりました♪」

見れば満面の笑みを浮かべるマオちゃんと肉親が見ても判別できないくらいに腫れ上がった顔のデビット君。

二人は幼なじみじゃから、こんな喧嘩もいつものことなのだろうと関心するワシなのであった……。

「ちょっとちょっと、キルカッツさん！
関心してないでもっと早くに止めてくれても良かったじゃないですか！？」

見た目こそボロボロだが流石は妖怪、すでに傷の治癒が始まっておるわい。

ワシも魔法を使わねばここまでの回復は出来んというのに凄いもんじゃの～。
河童秘伝の薬かの？

と考えていると、デビット君に少しばかり厳しい視線を向けるユティ。

「キルカッツ様は私と愛の食卓を楽しむことで忙しかったんだから諦めなさい。
愛ゆえに！　愛ゆえに私もキルカッツ様も貴方を助けることなんて不可能なのですから！」

「うむ、そうじゃ。
ユティへの愛ゆえにワシはお前さんら二人の喧嘩を止めるわけにはいかなかったのじゃよ。

決して今思いついた理由ではないぞ。
少しもボコられるデビット君がコメディアンのようで面白かったからではない」

この発言は嘘。

本当は面白そうだから、というだけの理由で傍観していたのじゃがな。

そう言いながら熱い抱擁を交わすワシらを羨ましげに見つめるマオちゃん。

若者すべてに言えることじゃが、素直にならんと幸福は掴めんぞい。

頑張れマオちゃん！

「あーもー、それじゃもういいですよ。
二人に何を言っても変わらないでしょうし。
それじゃすっかりウヤムヤになっちゃったけど海賊たちに掛けた石化魔法解きに来てください」

「うむ、良かろう」

すっかり海賊に関して忘れていたのは内緒じゃ。
こうしてワシらキルカッツ&ユティのラブラブペアは村を滅ぼし

かけた悪の海賊連中との話をするために家を出るのだった！

第七話：ホース・キックの呪いは嫌じゃな（後書き）

文字数が無駄に増え過ぎる要因は地の文の描写を書き過ぎるってのもあるんでしょうね。

過去の自分の作品を読み返すと本当に展開が早かったのに今では随分とスローペースになってますし。

まぁ、これも私が書きたくて書いている作品なので楽しむことを第一に考えましょう。

そしていつの日かプロ並みのアマとしてその名を轟かせる！

第8話：旗揚げって揚げ物の種類みたいじゃのう（前書き）

ノリで書いているのでどうなっても私の知ったこっちゃないぜ！
ってなノリで書いているのは作者である私自身なので作者である私すら先の展開が読めないのですから今回の話のような展開になるのも不思議じゃないという話です。

第8話：旗揚げって揚げ物の種類みたいじゃのう

「いやね、ここに河童たちの村があるって聞いたもんだからさ。
俺達『船幽霊海賊団』としては襲わざるを得ないって思ったんですよ。
ほら、河童と船幽霊って、同じ水に関係した妖怪ですし、俺達は柄杓を持てば水の妖怪で一番強いって誇りを持っていたもんだから、無双プレイしてやるぜーってノリになっちゃうのも当然じゃないですか。
だから！　襲いました！！」

とまぁ、これが石化魔法を掛けっ放しにしていた海賊たちの石化を解いた直後のセリフである。

ワシの石化魔法は意識はあるままじゃから石化状態でもワシらの会話は聞こえておるし、実際に石化を解いたあとには何の目的で石化を解いたのか分かってくれているので説明が省けてありがたい魔法でもある。

しかし、しかしじゃ。
こいつらのこの発言を聞くと、何故？　という思いが浮かぶのじゃよ。

「おどれらはスカかぁぁぁー！
この世界『わっちふぃーるど』には妖怪がうようよいるから船幽霊がいるのはいい。

じゃが、水繋がりで河童に優越感を持ちたいという理由で襲うとか何考えとるんじゃ！？」

というか船幽霊の海賊って、海戦では最強では？
とも思うが、ワシが来た時点でこの世界に最強を語れる存在はおらんのじゃがな。

「もういいわ。
キルカッツ様、こいつらみたいな誇り無き悪には『髪の毛や爪にも神経を通わす魔法』でも掛けてあげればどうですか？」

「流石はwワシの愛しのユティ。実にすばらしい考えじゃ。
……と言いたいところじゃが、それは流石に可哀想な気もするのう……。
精々『不老不死』ではなく、『不死の呪い』でも掛けて、不死でありながら不老ではないという永遠に老い続ける恐怖を与えるというのはどうじゃろうかと思うのじゃよ」

「すいませんでしたぁぁぁぁー！
もう反省していますのでそれだけはどうかご勘弁を～！」

ちゅーか、そんな面倒な魔法掛けるつもりないんじゃがな。
大体水に関係する妖怪ってのも多いが、船幽霊が最強だなんて話は聞いたことがないのう。

この世界では水の妖怪は、船幽霊と河童しかおらんのじゃろうか？

「キルカッツさん、キルカッツさん。
この世界には水に関係する妖怪だと河童の上位種でもある『ヒマガッパ』や魚人の上位種の『オトト軍』なんかもいますよ。
さらには水の妖怪頭領の『竜神』リヴァイアちゃんは酒の席で面白半分にこの村の属する国のすぐ隣に位置する国を滅ぼしたりしてますし」

「『リヴァイアさん』じゃなくて『リヴァイアちゃん』ですか。
それにノリで一国を滅ぼすだなんて、私たちと気が合いそうですね♪」

「そうじゃのう。ワシらも常にノリで行動しておるし、なんならそのリヴァイアちゃんの家に電撃訪問するのも面白いかもしれんのう♪」

まさに以心伝心。
ワシとユティは心を読むまでもなく息ぴったりの最高のパートナーじゃ！

ちなみに他に水の妖怪として有名な海坊主なんかもおるそうじゃ。

ただまぁ、海坊主は一人一種の妖怪で、日々喧嘩に明け暮れていた両耳のない犬の姿をした妖怪だったそうじゃが溺れて死んだそう

じゃ。

海坊主が溺れて死ぬとは、この世界の妖怪はえらく生き物じみちょるのぅ。

まぁ、古代人が科学的に作ったのなら仕方がない事じゃろうが。

「まぁ、そんなことは置いといて。
それより海賊ども、お主らワシに負けたんじゃからワシの子分になれ。
そろそろこの村を拠点にしつつ、この目の前に広がる海へと冒険に繰り出したかったところじゃしのう」

というのは、たった今思いついたことじゃ。
世の中ノリで動いてこそじゃからな。

「よしユティ、次の目的地は海じゃ！
海へ出ることのみを目的として出ようじゃないか！！」

「がってんキルカッツ様！
この船幽霊たちもいい船持ってますし、このまま私達が頭となって悪徳領主や貴族なんかを襲うのもいいですね♪」

そう言ってユティはポケットからモーニングスター（トゲ付き棍棒）を手に可愛らしい笑みを浮かべる。

うむうむ、やはりユティは武器を手にもっとると気が一番可愛く見えるかもしれんの～♪

「……あの、何でこんな流れになったんですか？」

すっかり存在を忘れていた河童のデビット君。
じゃが、ワシが彼を放置していたのには勿論理由があるぞい。

彼は先ほどから、まだ恋人ではないが両想いのマオちゃんにチョークスリーパーに見せかけて思いっきり抱きしめられていたから放置していたのじゃ。

マオちゃんの目が「邪魔するな～」と、怨念のように禍々しい感情を向けてきおったからのう。

うかつに手を出そうものならマオちゃんだけでなく、ユティまでキレて大喧嘩になっていたじゃろうし。

ってなわけで、キルカッツ海賊団の旗揚げじゃー！

第8話：旗揚げって揚げ物の種類みたいじゃのう（後書き）

……まぁ、これもノリですね。

別にキルカッツは他人の恋路を邪魔をしようとしている訳じゃありませんし、ユティを一番に考えているだけです。

まぁ、ユティの方もキルカッツのことを一番に考えているので二人が合わさって「スーパーパワーを見せてやるウーハー！」な状態になっているだけですので周りに迷惑がかかることもありますが、基本ほのぼのとやっていきます。

それと海の妖怪と言えば海坊主なんかが個人的には特に有名ですが、この作品の海坊主は一人一種の妖怪で、すでに故人となっているという設定です。

具体的には片腕の熊を倒すためにロープで縛って沼底に沈めようとしたら、自らの足にも絡まってしまい溺れ死んだのですよ。

紅桜……、お前は実に立派な漢だ。（詳しくは漫画『銀牙　一流れ星　銀一』をご一読ください）

第9話：突然目的が出来るのもいつものこと（前書き）

世界～の海は～、ワシ～の海～♪

いやさ、キャプテン・ハーロックって「キャプテン」と名が付くキャラで一番カッコいいんじゃないだろうか？

第9話：突然目的が出来るのもいつものこと

「面舵いっぱーい」

「ヨーソロー」

青い太陽に白い海！
うーん、最高の海賊日和じゃの～。
という始まり方をしてみたキルカッツ海賊団の航海初日であるのじゃ。

「略しておっぱーい」

「ヨーソロー！！！」

船員の船幽霊たちもノリが良く、ワシらに付いてきてくれておる。
決して脅したわけではないぞ。

「キルカッツ様、私以外のおっぱいを欲するというのなら許しませんよ」

今日も可愛いユティは、ワシが浮気でもするのかと疑っておるのじゃろうか？

「ふっ、ワシがユティ以外の女を抱く訳がなかろう。今のは君の嫉妬する顔が見たくて言っただけじゃ♪」

「もう、キルカッツ様ったら〜♪」

「はっはっは」

ユティは可愛い！

それこそ世界と天秤に賭けても悩むことなくワシはユティを選択出来るくらい愛しておる。

それだけ惚れた女がおると言うのに浮気なんぞするわけがなかろう。

「キルカッツ船長〜〜、突然ですがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ、私たちのぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ身の上話を聞いてくださいッ！」

「本当に突然じゃな。相変わらず無駄に伸ばす口調はスルーして、とりあえず言ってみ

い」

元船長にして現・副船長のカイ・ゾクオ。

説明が無駄に長くなるので手短に纏めると、

一、元々カイ・ゾクオ船長一行は海を愛する冒険家だった。
二、だが、ある日自分たちの愛する海を突然どこぞの貴族が自分の領地とし、軍を率いてカイ船幽霊海賊団を追い出した。
三、それで海賊になった。

……これマジ？

「マジと書いて本気と読むくらいマジマジですよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！
俺達はぁぁぁぁ「お前、口調が面倒だから副副船長に代われ」すいませぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！！」

こいつの口調だりぃ。

作者的にも最初は使い捨ての予定だったのにしぶとく生き残っただけじゃしの。

「お呼びとあらば即参上」。

オデこそは、キルカッツ海賊団副副船長のヒトシである！」

「よくぞ参ったヒトシよ！
そして始めましてじゃな。
何だかよく分からんノリで船長をやっとるキルカッツじゃ。
これからお前らを追い出した海に向かい、そこの貴族とやらをボコるから舵取り頼むぞ」

「御意」

こいつとは面識はなかったが、元副船長にして現・副副船長のヒトシ・レツカン。

船長が種族『船幽霊』なもんじゃから戦闘は一人でやるし、船員は戦闘に関わらんから面識を取る必要もないという理由でこれまでスルーしておったが、どうやら『コンプレックス』という種族の妖怪らしいのう。

海と言えば夏、夏と言えば海じゃが、そんな夏を楽しく過ごすことが出来ない暗くてキモい連中の怨念から生まれた妖怪じゃと漫画『ＧＳ美神極楽大作戦』では描かれておったが、古代人は何を思ってこいつのようなマイナーかつ新参者の妖怪なんぞを作ったのじゃろうか？

ヒトシの口調は忍者マニアということで妙に固くなって居るが、その外見は醜く肥え太った肉の塊という外見じゃ。

河童の連中は服装も外見も個人の趣味で色々といじっておったと言うのに随分とあんまりな体型じゃ。

少しは痩せる努力をせんかい！
見てみい、ユティだってめっちゃ引いとるじゃろうが！

「オデは太っていることが妖怪としてのアイデンティティーだから痩せるなんてできません。
むしろ動けるデブってカッコいいじゃないですか」

「しかし醜いことに違いありません。
あなたそれでよく恥ずかしくないですね？
私はキルカッツ様のお美しいお姿によって審美眼が極まっていますが、それを差し引いてもあなたは醜すぎます。
死ねばいいのに死ねばいいのに死ねばいいのに死ねばいいのに」

「ストップじゃユティ。
ヒトシは外見こそは醜いが十分立派な海賊じゃ。
あまり心を折るでない」

ユティにボロカスに言われたヒトシは心を折られてしまった。

忍者に憧れていた割には心が弱すぎるじゃろ。

「ハハハハハ……、なんだかオデが醜いから湿っぽい話になってし

まったね。
まぁ、これでも海の妖怪だから仕方がないんだけどね。ハハハ…
……はぁ」

こうして副副船長の心を折りながらも天候にも風にも恵まれたワシらキルカッツ海賊団の船旅はいいものなのであった（無理矢理なまとめ）。
チャンチャン♪

第９話：突然目的が出来るのもいつものこと（後書き）

昔と違って二作三作同時執筆がきつくなってきた……。

１０作目の筆が止まってしまうな。

まぁ、ＭＨＰ２Ｇがいま熱いですからね。

第１０話：権力者ってのは馬鹿なのが相場じゃ（前書き）

漫画「ぷぎゅる」は最高に面白いと思います！
作者は天才でしょう！！

そういえば自己紹介欄には書いていませんが、私の職業は「ぷぎゅる」の登場人物、ミゾレの好みのタイプに合致する職業だったりします。
血液型や生年月日を書いておきながら、あえて職業欄だけ書いていないのはクイズ感覚で、誰かが「お前の職業は〇〇だ！」ってなコメントを待っていただけなんですよねw

たぶん、来ないでしょうからここに書きました。

第１０話：権力者ってのは馬鹿なのが相場じゃ

権力者が滅ぶのは無能が理由ではなく、怠慢が原因だそうじゃが、そんな瑣末なことはワシとユティが本気を出してしまえば理由の一つとして埋もれてしまうのじゃよ。

つまりワシが何を言いたいかというとな。

「キルカッツ様、城の兵士は全て捕縛しましたよ♪
奴ら愚かにも私に向って剣を振り上げてきましたが一人も殺していませんよ。褒めてください♪」

「はっはっは、今日も可愛いのう我が愛しのユティ♪
まさか前回の話でカイ・ゾクオ副船長の話に出てきたこの作品のラスボス的存在の貴族様とやらを次の話でいきなり倒してしまうだなんて流石はユティ！
そして流石はワシじゃ」

只今、とある貴族の城に滞在しているワシとユティ。

おまけで海賊団の面々もおるが、この物語ではワシとユティのラブラブ話以外はすべておまけなので会えて描写する必要はないじゃろう。

「しっかし、こんな弱そうな奴が貴族にして船幽霊海賊団を海から

追い出しておったとはのう。
部下兵士共も大して強くなかったが、一体どうやって船幽霊の海賊相手に力押しで勝てたんじゃろうか？」

「うるさい！　俺様が本気を出せばお前らなんてケチョンケチョンだったんだ。
明日から本気出そうと思ってたのに今日来るお前らが悪いんだろうが！」

いまワシの目の前には適当に捕縛しておいた貴族がおる。
えらく元気で生意気じゃが、ワシの経験から言えば「明日からがんばる」という奴は絶対に頑張らん。

ちなみに『船幽霊海賊団』が負けたのは、貴族の兵士は空を飛べるから船幽霊の特性の影響を受けなかったからだそうじゃ。

「俺様の城を襲ってただで済むと思うなよ！
俺は種族「ゴブリン」の妖怪。仲間は沢山いるんだぞ！」

「この世界、天狗が小物だったり、河童の村が河ではなく海辺にあったりしますし、貴族が妖怪の中でも特に知名度の高い『鬼』だの『悪魔』だのではないのには目をつぶりますがゴブリンですか？
ゴブリンって妖怪なんでしょうか？」

「流石はワシのユティ、着眼点が普通に読者の疑問に答えるように

指摘するのう。
それについてワシが予想してみるに、どうやら鬼やら悪魔やらはこの世界ではおらんのじゃ。
そして、そんな事はどうでも良く、この馬鹿なゴブリン貴族を倒してしまえば全て解決というだけの　話じゃな」

「流石は私のキルカッツ様ですわぁ～ん♪
ラスボスがゴブリンというどうでもいい雑魚だったことすら瑣末な問題としてスルーしてしまうだなんて『流石』どころか『流岩』とすら言えそうですね♪」

「更に言うならワシにとって、ユティの方が『流岩』すら越えて『流地』じゃのう♪」

「いやいやキルカッツ様の方が♪」

「いやいやいや、ユティの方こそ♪」

「いい加減、話を進めたらどうですか？」

むぅ、せっかくワシとユティがイチャイチャしておるのに無粋なことを言うな、副副船長よ。

見れば城の兵士たち全員を捕縛し終えているようじゃし、あとはこの城から金銀財宝を奪えばそれで終いじゃな。

「よぉーし野郎どもー。
キルカッツ海賊団はこうして憎き貴族を倒して海を取り戻したのじゃからあとは任せたぞ！
ようするに海賊をやるのに飽きたから、カイ副船長を再び船長として達者で暮らせよー」

「なっ！？　海賊団を捨てるというのですか！？
カイ現・副船長を船長に戻すよりもキルカッツ船長が船長のままでいてくださいよー。
オデらはもうキルカッツ船長なしじゃ海を渡るなんてできませんでござるござるござござござる」

ん？　副副船長が意外そうな顔をしておるのう。
てっきり船を乗っ取ったワシらを恨んでおるもんじゃと思っておったが、無能なカイ船長よりも慕われておったのか？
じゃが、ワシは立ち止まるわけにはいかん。
なぜなら……、その方がアバンチュールじゃから！

「私とキルカッツ様の邪魔をしようと言うのでしたら、元仲間とは言えただでは済みませんよ？
キルカッツ様は私と愛を営むのに忙しいのです。
貴族は潰したのですから、これからは自由にしてください。

あ、ただしカッツパルゲル村の河童の皆さんを襲うようでしたら『不老じゃない不死の呪い』をかけますからね♪」

「そういう訳じゃ、諦めてどこぞで海賊稼業に勤しむがええ。ワシらにはワシらの冒険があるのじゃからな」

こうして貴族をとっちめて金と海を手に入れたワシらは海賊団と別れ、新たな冒険へと旅立った。

「ワシらの冒険はまだまだこれからじゃな」

「キルカッツ様とでしたら、何処へでもついていきますわ♪」

「ワシもユティがおればどこにでも行ける気がするわい♪」

こうしてワシらは海賊たちと別れ、今度は陸路で旅を続ける。

目的は新たなアバンチュールを手に入れるために。

『アバンチュールの名の下に』第一部・完

ヨイヤサ先生の次回作にご期待ください！

「……ところで俺達は出番なしなのかな？」

「いい加減デビット君が押し倒してくれないのなら私の方から押し倒してあげるんだから！」

忘れていたわけではない。

カップルゲル村在住の河童カップル、デビット君とマオちゃんもめでたく男女の仲となったのじゃった♪

「いやいや、俺達をこんな最後のおまけにみたいな扱いって酷くないですかぁぁぁぁ～アッー！？」

マオちゃんは積極的なようじゃったと付け加えておこう。

第１０話：権力者ってのは馬鹿なのが相場じゃ（後書き）

いやぁ、最近急速に人気が出ているＭＡＤ動画の影響で、『ダークソウル』にて二代目アンバサ戦士を育成中。今度は＞肉断ち包丁＜で料理人プレイです。片手持ちのＲ２攻撃が原始人みたいで面白いｗ

スタートして早速、太陽を眺めていたソラールさんを瞬殺して装備をはぎ取って太陽戦士として活躍中です。

「天体戦士サンレッド」も影響しているのでしょうが、私は元々アンバサ戦士ですからね。

攻略メインなら魔法戦士の方が楽ですけど、新しく作った「＆ｒａｙ（アンドレイ）」君で太陽戦士プレイを頑張ろうと思います。

でも名前のスペルをＲではなくＬにするべきだったかな……。

第１１話：新章幕開け！　新たなる戦い！！（前書き）

ついに始まりました『アバンチュールの名の下に』第二部。

さぁ、ここから物語はどうなっていくのか！？

第１１話：新章幕開け！　新たなる戦い！！

？？？ｓｉｄｅ

くっくっくっく。キルカッツとやら、俺様を殺しておかなかったのは失敗だったなぁ～。

そう、俺様は『船幽霊海賊団』を海から追い出したゴブリン族一のハンサムマスクを誇る貴族様だ！

俺様はまだ「奥の手」ならぬ「億の手」を隠しているのさ。

「貴族様、およびでしょうか？」

「おぉ、よくぞ参った俺様の奥の手にして億の兵士に相当する戦力の『悪魔』よ。

俺様をコケにして城を崩壊させて財産を奪っていったキルカッツ・ウィルムヘッドとユティ・パミュロという二人組を始末するのだ！

俺様は、今でもお前さえキルカッツ共が攻めて来た時に城にいてくれれば勝てたと確信しておるのだからな」

俺様の予感は十中一二で当たればいいなぁ～と思っているからまず間違いなく『悪魔』の勝ちだ！

「拙者に任せていただければ必ずや貴族様に逆らった不届き者を瞬殺してみせましょう。
拙者はこれまでに９８人もの反逆者を殺してきたのです。
殺害人数１００人突破を達成して見せましょう」

そう言った瞬間『悪魔』は俺様の前から姿を消す。

くっくっく、奴ならば憎きキルカッツ＆ユティらを始末してくれるだろう。

ふはーっはっはっはっはっはっは！

キルカッツｓｉｄｅ

ゴヅン
ジュボァ

「うほー、ユティの今の拳骨、物凄い痛そうじゃの～♪」

「いえいえ、まだまだ本気ではありませんよ。

それよりもキルカッツ様の魔法の方こそいい音をさせていたじゃないですか♪」

「た、助けてくれ……」

はい、誰もが予想していた通り上で描かれていた貴族の逆恨み（ワシらは悪くない♪）によって寄こされた『悪魔』とやらは瞬殺してやったところじゃ。

「さぁて、ここからどうすればアバンチュールっぽさを出せるかのう？」

勿論、雑魚を倒すと言うのはどうでもいい話じゃし、一番に考えるのはこれじゃ。

どうすればアバンチュールが満喫できるか？　それこそ全てにして第一。

「では定番ですがこういうのはどうでしょう？
悪の貴族に攫われた私がキルカッツ様によって救いだされる。
その後、瓦礫の山と化した貴族の城で手を取り合う美しいカップル。
完璧ですわん♪」

「よし、それいただき！」

こうして前回の話でボコっただけで勘弁してやった貴族を再びボコり、その後『不老ではない不死の呪い』を掛けて河童の村へと戻り、その後は自分たちには、ちゃんとした「不老不死の魔法」を掛けて永遠に変わらぬ愛を営み続けるのじゃった。

流石はキルカッツ・ウィルムヘッド。
流石はユティ・パミュロ。

ワシらはこうしてアバンチュールを満喫したのじゃった。

『アバンチュールの名の下に』第二部・完

第１１話：新章幕開け！　新たなる戦い！！（後書き）

こうなりました。
そして完結ゥゥゥ～！

いやぁ、こういうラストを一度書いてみたかったんですよねｗ
たぶん二度はしないと思いますが、私のことですから繰り返すかもしれませんけど。

それではまた次回作でお会いしましょう！
これまで読んでいただきありがとうございました♪

１０作目はどれにしようかな……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0008z/

アバンチュールの名の下に

2011年12月9日01時06分発行